

本多静六通信

第31号

発行
本多静六博士会
を顕彰する会

本多静六博士の勇氣と信念に学ぶ

公益財団法人 都市防災美化協会理事長 中島 宏



本多静六博士の勇氣と信念に学び、公園緑地と共に歩んできた私

が、本多静六賞を受賞できました。この度、第十五回本多静六賞受賞の感想、造園分野からみた本多静六博士の業績、本多静六をモチーフとしたエッセイなど、本多静六博士に関連した内容で「本多静六通信第三十一号」への執筆を依頼されました。

受賞の感想といえば、トラ年に生まれた私が、しかも五黄のトラ年に公園の父とも言われております、本多静六博士の賞をいただきましたことは、光栄であり夢のよ

うです。この賞を受賞できましたのも、埼玉県知事大野元裕様はじめ県職員のみなさま、久喜市市長梅田修一様はじめ顕彰事業関係者のみなさま、選考委員会委員長小川秀樹様はじめ選考委員のみなさま、そして推薦者の埼玉県職業能力開発協会会長岡村藤美様はじめ埼玉県造園関係者のみなさまなど、多くの皆様方のお蔭と心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

今年の本多静六賞に
造園技術者中島さん
巨木の移植に尽力
県は20日、緑の手を届ける社
会づくりに貢献した個人や団
体を表彰する「本多静六賞」
の表彰式を開催した。今年
の表彰式を主催した。今年
は「さいたま市」が受賞。中島
さんは文化財庭園の管理など
の経験を生かして、201
7年度に日本庭園賞を受
賞し、ものづくりの力で
造園技術者の育成に取り組
んできた。

大野元裕知事は「本多静六
賞で初めて造園分野での受
賞者に中島さんを選んだ

「本多先生と同じように巨木
の移植成功させたエピソードに
感動を受けた」と述べた。
中島さんは01年の都市博覧会
「山きりら博」に際し、伐
採された予定だった樹齢12
0年の巨木の移植を成功させ
た時のことを「本多先生の氣
持が降りてきた」と振り返
り、「尊敬する本多先生の賞
を受賞し、涙が出るほどうれ
しい」と喜んだ。

本多静六（1866-19
52）は富市（旧浦和町）
出身で日本最初の林学博士
で、森や公園の造成に尽力
した。同賞は県が07年に創設
し、「これまでに県がかりの林
業経営者や県立浦和高校同窓

会を16の個人、団体に贈ら
れている。（伊藤明日香
提供）

大野元裕知事（右）が本多静六
賞の表彰状を受け取った中島さん
（中央）。20日、さいたま市浦
和区
埼玉県庁
20日
5/27

図1 埼玉新聞2022年5月27日朝刊

日本の公園史に大きな影響
明治六年（一八七三）の太政官
布達で、「公園」という用語が初
めて公式使用されて以来、令和五
年（二〇二三）には百五十年にな
ります。

明治元年（一八六八）、徳川将
軍家による江戸幕府が崩壊し、天
皇を中心とする明治新政府が成立
しました。その新政府によって、
政治、経済、社会において大きな
変革の時代が始まり、近代化と西
洋化をもたらしました。そのうち
の一つとして、公園という概念が
なかった時代に、国の最高機関で
あった太政官が、いち早く明治六
年（一八七三）の太政官布達によ
り日本の公園制度を発足させまし

た。なぜかという疑問にたいして
は、外国人の発言を重視し、召し
上げてきた徳川色の強い江戸の名
所を選び、そこを今まで存在して
いなかった西洋式公園にすること
で、江戸が終わり新しく東京とし
て生まれ変わる近代化のシンボル
として国民に浸透させようとした
のではないかと推測しました。し
かし、明治六年の太政官布達公園
は、江戸時代の社寺境内地のような
「群衆遊観ノ場所」を新たに公
園としたものであり、レクリエー
ション地としては機能しても、近
代的な公園という意味では程遠い
ものがありました。その後、明治
二十一年（一八八八）十一月の東
京市区改正委員会において、陸軍
日比谷練兵所跡を公園にすること
が決定され、明治二十二年五月に
日比谷公園が告示されました。日
比谷公園の設計は、明治二十七年
に日本園芸会に委託されましたが
採用されず、その後も辰野金吾博
士を含めて多くの人々に委託不採
用が繰り返されることになりました
。前例のない難航を極めていま
したところ、明治三十四年（一九
〇一）に本多静六博士に委託され、
その案がようやく市会で可決され
ました。日比谷公園の設計に、こ

れほどまでに歳月が費やされた理由について、東京市や日本園芸会の案は純日本式庭園をモデルにした築山林泉式であって当時の欧化思潮に歓迎されなかったこと、辰野案は逆に西洋の都市広場そのもののように単純すぎたことなどがあげられました。それに比べて本多案は、専門の造林学とドイツ留学の経験から従来の神社・仏閣に由来する公園とは異なる自由な場としてのドイツ風樹林と運動場、花壇等からなる近代洋風公園案でした。

本多博士に委託された面積約十六ヘクタールの日比谷公園の設計は、すぐに出来上がりしましたが、池は身投げの名所になりはしないかとか、門に扉をつけないと花や木が盗まれるのではないかとかなどと、非難や注文が続出したり、予算がなくてただ同然に農科大学から払い下げられて植えた小さな苗木も、今では高さ二十メートル、幹周り四メートル余りに大きく成長し、ビジネス街に囲まれた緑のオアシスとして多くの人々に親しまれている東京都立の中央公園になっております。

わが国最初の「洋風公園」となった日比谷公園の設計は、その後の

新設公園設計に多大な影響を与えているばかりでなく、林学や農学出身の人々が公園設計に携わる契機ともなりました。本多博士の影響は、昭和三十九年（一九六四）の東京オリンピック第二会場事業にも引き継がれております。



図2 完成時の日比谷公園平面図

■本多博士の人柄が偲ばれる庭園

「天災は忘れたころに襲ってくる」は寺田寅彦の名言ですが、昨今の状況は忘れる暇がないくらい、次々に大地震が発生しています。

そのような中、都市防災を考える上でなくてはならない存在が公園

緑地であります。そのきっかけとなったのが相模湾を震源とする大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災であり、令和五年（二〇二三）には震災後早くも百年になります。

未曾有の被害は、東京を中心に千葉、埼玉、静岡、山梨、茨城、長野、栃木、群馬の各県に及び、死者・行方不明者十萬五千人余、焼失家屋二十一万戸余に及んだといわれています。

火災で焼失した区域の周縁を「焼け止まり線」と称していますが、関東大震災の場合、東京の公園緑地等が焼け止まりに関与した部分は、被災地全体の約三十パーセントであったといわれています。上野公園、浅草公園、湯島公園、小石川後楽園、皇居外苑、日比谷公園、浜離宮庭園、芝公園などですが、焼け止まりによって救われた命は、約一千六百万人ともいわれ、上野公園では約五十万人、皇居外苑では約三十万人、芝公園では約二十万人、日比谷公園では約十五万人が救われました。

関東大震災で避難地となった広場などの安全性についてみると、同じ四万平方メートル程度の敷地面積で、所在地も近い深川岩崎邸

（現、清澄庭園）と本所旧陸軍被服廠跡（現、横綱町公園ほか）を比較してみると、深川岩崎邸では死傷者が少ないものの、本所旧陸軍被服廠跡では多くの焼死者を出しています。深川岩崎邸には、外堀の周囲にスタジイヤタブノキ（イヌグス）などの常緑広葉樹を主体とした植込みがあり、庭の中央部に池がありました。それらが火流の勢いを抑え、避難していた一、二万人余の命を救いました。一方、本所旧陸軍被服廠跡は、空き地で樹木がなかったために、南から迫った炎が大旋風となって避難者を襲い、三万八千人余の死者を出したのです。近くにあつてほぼ同面積の両者の明暗を分けたのは、外でもない「樹木の存在」の有無でした。

関東大震災の惨事の中で比較的避難効果があつたのは、林泉式日本庭園でした。このことから、惨事による不言の警告を将来に残すために、震災後、横綱町公園には、犠牲者のために住民の寄付により慰霊堂が建設されましたが、同時に、本多博士により「樹木の大切さ」を象徴する緑の多い林泉式日本庭園も整備されて、緑を愛した本多先生を偲ぶよすがとなつ

ています。

■オリンピックと緑豊かな会場

昭和二十七年（一九五二）四月、サンフランシスコ講和条約発効とともに、我が国は独立を回復しました。

昭和三十年（一九五五）代に入り、舗装されていない道路を三輪車や路面電車（ちんちん電車）が走る時代に、東京都の人口はふくれあがり八百万人を超えて、昭和二十年代初頭の倍に達するとともに、日本経済も順調な回復と同時に財政基盤の充実を反映して、東京都では昭和三十一年以降、公園の戦後の復興復旧から新規造成時代に代まりました。このような情勢下で、第十八回オリンピックは、昭和三十四年のIOC総会で東京大会開催が決定され、オリンピック東京大会第二会場に選ばれた駒沢公園では、バレーボール、レスリング、サッカー、ホッケーが開催種目に決定されました。

昭和三十六年（一九六一）四月に、「駒沢運動公園の基本計画に関する研究」報告書がまとめられ、それに基づいて、駒沢公園の整備事業は、工事の設計、監理業務を直営で行うことになりました。同

年五月、公園敷地内に東京都オリンピック施設建設事務所が発足し、駒沢体育館と駒沢陸上競技場の基本設計、実施設計が委託され、三十六年度には、主要排水管の埋設および盛土工事などに着手し、一方では、千本の植栽用立木の買い付け、根回しや保護育成が行われました。

昭和三十七年三月に、基本計画の樹木を多くした静かな雰囲気をつくるために体育館と陸上競技場のほぼ半分ほどを地面を掘り下げた場所に建設する設計書が提出されました。

昭和三十七年四月、幸いなことに私は、東京都オリンピック施設建設事務所就職し、またとない大事業に参加することになりました。基本計画の樹木を多くして静かな雰囲気をつくるという考え方に基づいて、建築・土木・造園の工事が一斉に開始された大事業の幕開けでした。

初めて携わった仕事は、三十六年度から探し求めていた幹回り六十〜百二十センチメートルの大樹千本のうちの一部を千葉県に見に行き、買うことになった樹木（マテバシイ、ヤマモモ）の樹高、葉張、幹回を目測で測って台帳に記

入し、樹木の下枝の上に東京都のマークと番号をつけたことです。続いて、競技施設の基礎工事、道路築造工事が相次いで行われていきましたが、道路や園路の街路樹は、大会時までには整然とした美しさを作り出す必要上、道路工事中に並行して、貫通道路には購入樹木のイチヨウ幹回り六十〜百二十センチメートルのもの十五本、主要園路にはケヤキ幹回り六十〜九十七センチメートルのもの百十五本、延長千メートルに及ぶ植栽を完了しました。

翌三十八年度には、三橋一也造園課長のもとで組織が拡大され職員が増員が図られました。しかし、植栽の設計・施工監督については、直営で行う時代でしたので、職員増員に対して植栽担当の上司であった村木氏が、すでに進めてきた設計・施工の統一性等が損なわれると猛反対をされ、前年度に引き続き村木・中島の二人だけで、駒沢公園（面積約四十ヘクタール）のすべての植栽の設計・施工監督を担当することになりました。その時に、村木氏から本多博士の勇氣と信念について聞かされた私は本多博士の意気に感じ、植栽設計・施工にあたり、①緑に囲まれた

スポーツセンターとすること、②巨大な樹木を使用すること、③工期を短縮するために、機械力の導入を図ること、④巨大な建築物に対応する日本庭園の手法を採用すること、⑤日本の郷土樹木・草花を主として伝統樹芸も採用するという村木氏の意見に同意しました。植栽工事では、十区画に分割し



図3 駒沢オリンピック公園の全景 出典・駒沢公園パンフレット

て同時に着手しましたが、建築、土木も併せて約八十の建設業者が集中したこともあり、敷地全体が輻輳を極め、設計・施工監督に加えて事業調整が重要な仕事となり

ました。就職の前年三十六年度に購入した大きな樹木がトレーラ等で夜間に搬入されてくるので、車上で表裏や形状及び配植を判断して、レッカー車で直接立込みの指示をするため、事務所に泊まり込んで対応し、約二年間で完成することができました。植栽に要した樹木、灌木の総計は約十四万本、地被類の総計は約九万平方メートルで、昭和三十八年度内に全植栽を終了しました。

完成直後の評判記には、建築評論家川添登氏のこんな一説があります。「駒沢オリンピック公園での最大の功績者は、東京都の造園課であろう。数年前から、慎重に計画して植付けられた樹木や芝は、建築物の竣工と同時に、すばらしい緑をあたえている。(中略)あの広大な敷地に、見事に植込まれた樹木こそ、世界に誇ってもよい日本庭園技術の勝利である。」(朝日ジャーナル三十九・八・二十三)

このことから、昭和三十九年東京オリンピックの会場となった駒沢オリンピック公園は、体育施設のデザインと中央広場の構成、そして植栽景観を機能的かつ美的に統一した自然で樹林本位の公園

デザインになり、本多博士による明治時代の近代洋風公園と大正時代の林泉式を主にした日本庭園の影響を受けて、オリンピック大会を支えた日本の造園技術水準を世界に示した昭和時代の「造園傑作」というより「造園遺産」ともいえるすばらしい公園になりました。

■蘇った大径木をめぐる移植物語

私は、月刊誌(THISIS)読売)に「首かけ銀杏の運命」と題した随想を平成六年(一九九四)に書きました。その随想の一部を紹介するのは、その当時、私がいかに本多博士の勇気と信念に感銘を受け、関心を持ったかという事の証でもあります。

――大地のぬくもりが戻ってきて、園内の落葉樹が一齐に色めき立つと、日比谷公園の春がスタートする。木々の淡い芽吹きは見られるほどに美しいが、中でも私が毎朝話しかける老イチョウの芽吹きは感動的だ。公園内の中ほどにあるレストラン「松本楼」の前に植えられていて、天気の良い日の昼休みには、素人カメラマンに変身する私のかけがえないモデルである。

老イチョウが現在の場所に移さ

れたのは、明治三十四年(一九〇一)である。立地の日比谷交差点付近が道路の拡張工事にはいり、切り倒される運命にあったものを、後に日比谷公園の設計者になった本多静六博士が非常に惜しんで、伐採中止を議会に懇請し、危うく一命を取りとめた。その折博士が、「自分の首をかけて」移植を成功させると約束したことから、老イチョウは通称「首かけ銀杏」と呼ばれるようになった。

記録によれば、樹齢はおよそ四百歳、交差点付近の鍋島屋敷の庭にあつた当時、すでに三百歳を超えており、とうてい移植は無理とされ、いったん業者に払い下げられて、地上から十一メートルまでに切り落とされていた。その老イチョウを助けるために首をかけて奔走した博士の熱意が通じたのであろう。移植地点まで四百五十メートルの距離の移植に二十五日間もかかるという大移植工事や、移植後の火災によるやけど等にもよく耐えて、命永らえ今も年輪を重ねている。今では寄つてくる小鳥もふえて十五種類以上に及ぶとか。(中略) 輪廻の周期を異



図4 イチョウの立曳き運搬 (昭和40年撮影被写体：筆者)

にする人や緑、鳥や昆虫が一体となって溶け込んでいる微笑ましい平和の光景を、命ある限り見続けていくことが、命永らえ、歴史の生き証人でもある首かけ銀杏の運命なのかもしれない……。

その後、昭和三十九年(一九六四)八月、駒沢公園の完成後、東京都公園緑地事務所工事課植物係に異動し、昭和四十年、国立博物館内の東洋古美術を展示する東洋館建設の折には、支障となる幹物三メートルの大イチョウを伐採せずに、伝統的技術である立曳法で移植して保存するという仕事にかかりましたが、緑を大事に扱う建築家の心意気にも感激しました。

その折、私にとりまして日比谷公園の首かけイチョウの移植にも使われたと推測される立曳法に携わ

れましたことは幸せな経験でありました。

本多静六博士の「自分の首をかけて」移植の成功を約束し、保存することに成功したという首かけイチヨウの伝説は、あまりにも有名ですが、そんな本多静六博士の



図5 ヤマモモの運搬、植付け、仕上がり
出典：改定緑化・植栽マニュアル

勇気と信念の影響を受けて、私も首をかけてヤマモモの移植・植栽に成功した忘れがたい思い出があります。

東京都を退職後の私は、日産化学の子会社である日産緑化に入社し、職員の荒井、堀口と共に植物と農薬や屋上緑化用土壌に関する調査研究、植物による水質浄化の実験などをしておりました。

平成十三年（二〇〇一）の都市

博覧会「山口きらら博」(会期七月十四日～九月三十日)は、日産化学小野田工場創立百二十周年にあたりましたので、記念参加することになり、メインゲート正面の植栽の計画・設計から施工・管理までを日産緑化が任されました。樹齢百二十年余りの古木をメインにする構想を練り、計画書を山口県の担当課長に説明したところ、夏場の暑い時期に古木の移植は無理だとクレームがつかましたので、本多静六博士の言葉にならい「首をかけて成功させます」と申し上げたところ、「そこまで

植は無理だとクレームがつかましたので、本多静六博士の言葉にならい「首をかけて成功させます」と申し上げたところ、「そこまで

言うのなら任せる」との言を得て、樹木探しをはじめました。運よく宮崎県の区画整理事業で支障となり、伐採される運命にあった樹齢約百二十年のヤマモモ(高さ十二メートル、幹周一・八メートル、葉張六メートル)に出会い、枝を一本も切らずに一か月かけて枝を曲げたまま宮崎県から関門トンネルを経て、「きらら博」会場に運搬し、自然樹形に近い形で植付け、シンボルツリーとして景観美と癒し感を提供することができました。博覧会后、短期間で観賞できる姿に仕上げ、同時に植栽した草花や水草と調和し、入場者に感動と賛同を与えたと、主催者からも評価していただき説得したかいがあったと自己満足した懐かしい思い出です。

■おわりに

本多静六博士の勇気と信念に学び、「みどり」とともに歩んできましたところ、あこがれておりました博士の賞をいただくことができ、感謝しております。この受賞を契機に、これまでの経験を生かし「公園緑地と共生する社会づくり」のために、「みどりの歩み」を進めて参る所存であります。

第十五回本多静六賞

中島宏氏受賞について

埼玉県農林部森づくり課

主任 塩濱 瑠璃子

中島宏様におかれましては、第十五回本多静六賞の受賞、誠にありがとうございます。

中島様は、東京都庁に奉職後、公園緑地部長など数々の公園行政の要職を歴任され、退職後は、公益財団法人都市防災美化協会理事長を務められるなど、緑豊かで快適な生活環境の形成及び自然環境の保全の活動に尽力されています。加えて、造園技術の論文や多くの技術書の執筆のほか、全国で三百回を超える講演を行うなど、実践技術の研究やその伝承、人材の育成に多大な貢献をされています。

今回、これらの業績が認められ、造園分野から初めての本多静六賞の受賞となりました。授賞式では、知事から、「中島氏の活動は、まさに本多静六博士の精神と実行力を受け継いだもので、感銘を受けました。」との言葉がありました。末筆ではございますが、中島様の益々の御活躍とご健勝を祈念申し上げます。

伯祖母・本多いくの思い出

金子由紀子

本多いくは私が昔伊東に住んでいた子ども頃の頃、毎日のように遊びに行っていた隣の家の女主人で、私の祖母大西あいの姉である。

私は昭和十九年秋、東京都渋谷区桜丘の自宅から、疎開して伊東市鎌田歆光荘の祖父大西成道の隠居所に移転した。その時祖母の姉いくは隣接する本多邸に本多静六夫人として住んでいた。祖母から聞いたのだが、東京渋谷区桜丘の本多隠宅（本多静六別邸）と伊東の本多邸は資産家川村才次の未亡人であった川村いくが、本多静六の内縁の妻となつてから、静六の

ために建てたということである。

本多いくは明治十五年（一八八二）滋賀県大津市の旧家に生まれたが、少女の頃家が没落、両親を相次いで失い、末の妹あいを連れて東京本所の長姉の元に身を寄せた。その後明治三十六年（一九〇三）望まれて実業家川村才次と結婚したが、才次には先妻の娘うめがいたので、自分の末妹あいを連れ子として育てたそうである。あいはいくより九歳年下である。

いくはあいの母親代わりとしてあいを女学校に通わせ、あいが大西成道と結婚するまで養育した。



川村いく（右）とあい姉妹（大正9年頃）

私の祖母あいは成道と見合いをした時、自分は川村いくに育てられたので、終生いくに対して孝養を尽くしたいと話し、成道が了承したので結婚したとのことである。川村いくが本多静六の内縁の妻となり、伊東に終の棲

家を建てた時には、隣に住み、静六といくの老後の世話をすることになったのは、本多夫妻の希望であり、大西あいもかねてより覚悟していたことであった。

伊東の家に移転した時、大西あいの夫成道は五十歳を過ぎていたが、軍の徴用で東南アジアの海にいた。ちなみに大西成道は長く日本郵船に勤務し、外国航路の船の機関長であった為である。そして長く帰国できなかつた。

大西あいの婿養子大西保は、出征して九州方面におり、伊東の家に住んだのは大西あい、娘のまり子、孫の由紀子の三人だった。隣家には、本多夫妻と使用人が住んでいた。

まり子が昭和二十年（一九四五）に次女喜久子を出産した時、本多静六が近所の森口さんの家に、「助けてくれ！赤ん坊が生まれそうなんじゃ」と、突然やってきて、森口さんのおばさんが手伝いに行つたという話を、先年森口透さんから聞いて驚いた。あいは伊東の町へお産婆さんを迎えに行き、いくはまり子の側でおろおろしていたので、静六が近所に助けを求めに



本多静六・いく夫妻と筆者（中央）姉妹（昭和22年頃）
（久喜市所蔵）

行つたらしい。静六は唯一の男子であった。しかし防空壕を掘つたのは女性たちである。伊東の家の向かいの崖に防空壕を掘つたのはいくとあいだったが、そのほとんどは祖母が掘つたと母から聞いている。その防空壕は、今でもその痕跡が残っている。戦時中、伊東の町に空襲があり、米軍機が飛んでくると、静六は「B29だ！」と言つて夢中になって空を見ていて防空壕に入らないので、いくが苦勞して中に入れたとのことである。



歓光荘の自宅で寛ぐ本多静六(昭和25年頃)
右手奥からは相模湾や房総半島を望む
(久喜市所蔵)

ルーム)で、二つ並んだ藤椅子に腰かけて二人で食事して

本多いくについての私の記憶は三歳ぐらいからのものである。幼い頃、私は毎日のように本多の家にありがりこんで遊んでもらっていた。私はいくのことを「本多のおばあさま(長じては本多のおばあさま)」と呼んでいた。本多のおばあさまは講談社の絵本を沢山持っていて、私が行くとよく絵本を読んで下さった。『桃太郎』とか『猿蟹合戦』、『孝女白菊』などである。絵本の文字は、すべて片仮名で漢字にはルビがふってあった。字の部分がとても多くて、私はいくに文字を覚えさせてもらったと思う。今でも片仮名を平仮名と同じスピードで音読できるのは、本多のおばあさまのおかげである。

幼い頃は、妹の喜久子と二人で毎日朝から本多の家に行って遊んだ。大西の家より広く、本は沢山あるし、クレヨンもおばあさまの姫鏡台の引出しにゴロゴロと沢山入れてあった。私は本を読み、妹はお絵描きをした。畳廊下に寝ころんだり、柱に落書きしたこともある。お座敷の床の間を舞台に見立てて、劇の練習をしたこともある。お手伝いさんがお遊戯を教えてくれたこともあった。

本多のおじいさまは、講演に行ったり、伊東市の教育委員の仕事の縁で小学校の遠足について行ったりして、留守のことも多かった。本多のお二人のことで思い出すのは、庭に面した畳敷の部屋(サン

る姿、本多のおばあさまが大きなよだれかけをおじいさまの首にかけてあげていたのも覚えている。本多のおばあさまは妹と私を孫のようにかわいがって、いつもおいしいおやつを用意して下さった。喜んで食べる私たちを見ていらしたやさしい顔が今でも目に浮かぶ。後年腰を痛めて足が不自由になつたおばあさまは、半分寝たきり状態になつてしまった。それで本多のおじいさまが病気で入院した時には、付き添いもできず、代わりに私の祖母あいが、毎日病院に通つて、日中は付き添っていた。妹や私が学校の帰りに病院に寄ると、病室のベッドの上から本多のおじいさまが「誰か来たのかい?」と聞いた。先に病室に入った妹の背が低くて、寝ていたおじいさまからは、姿が見えなかったからである。病室は、中が一段高くなつていて、畳敷であった。



歓光荘の自宅庭で愛用の杖を持つ本多静六
(昭和25年頃・久喜市所蔵)

と触つてみたら、とても冷たかつたのを覚えている。本多のおばあさまは半分寝たきり状態だったので、東京で行われた葬儀にも出席できなかった。代わりに祖母と母が出席したのだ。本多静六が亡くなってから四年後、本多いくは亡くなった。享年七十三歳であった。本多いくの戒名は「月照光明大姉」かと記憶している。以前、祖母と一緒に青山墓地の本多静六の墓に参つた時、墓石の裏に「後妻本多いく」と記されていた。ちなみに本多静六との婚姻届が伊東市役所に提出されたのは昭和二十三年一月二十九日であった。

明治期の樺太・シベリアを訪れた

本多静六の記録について —『本多静六体験八十五年』を端緒として—

久喜市立郷土資料館主事兼学芸員 星野 諒

■はじめに

本多博士の自伝として代表的なものは、近年、実業之日本社から出版された『本多静六自伝体験八十五年』があります。同書は本多博士について知る上で、研究者をはじめ、多くの方々が参照している著書だと思えますが、実は同じような自伝は、本多博士が亡くなった昭和二十七年にも大日本雄弁会講談社(現在の講談社)から『本多静六体験八十五年』として出版されています。二つの書籍の内容を比べてみると、概ね同じ内容ですが、



『本多静六体験八十五年』
大日本雄弁会講談社、昭和27年
(久喜市所蔵)

昭和二十七年の講談社版にしか掲載されていない内容も見受けられます。これは紙面の都合や、時代に合せて、本多博士の自伝内容を取捨選択した等の理由が考えられますが、今回は講談社版の自伝にしか掲載されていない、本多博士の海外旅行の記録を端緒として、樺太・シベリアでの本多博士の記録についてご紹介します。

■海外旅行と本多博士

講談社版の自伝には「海外旅行」という章が立てられています。本多博士が海外視察を頻繁に行っていたことはよく知られていますが、この章の中で本多博士は「海外に遊ぶこと十九回、北はシベリアの果から、南は人間の住む最南端クリスタン島まで、又

アルプスやロツキー山脈はもちろんな南米のアンデスをも踏破し、アフリカにも二回出掛けた」と述べています。そうした海外視察の中から、「樺太及びシベリア旅行」と「南洋及び豪州旅行」の記録が自伝に掲載されています。次節では、その「樺太及びシベリア旅行」の内容を簡単にまとめてみます。

■『体験八十五年』の「樺太及びシベリア旅行」

本多博士は明治三十五年(一九〇二)、森林植物帯の調査のため、ドイツ人の農科大学教師とともに、樺太からシベリア、中国、朝鮮という行程で旅行しました(当時三十五歳)。この旅行は九十四日間を要し、本多博士は「毎日リュックサックを背負って、膝栗毛式でやるといふ、頗る困難な旅行であった」と述べています。本多博士は樺太の南方にあるコルサコフという都市に宿泊し、三日間程視察しました。その時の記録として、シコタイン松の木材を使った堅牢な家屋の様子や市街の往來の様子、また、ロシアの流刑地だったサハリンにおいて、コルサコフでの治安の悪さや酒を好む罪人たちの様子などをごく簡単に紹介しています。以上

のコルサコフでの記録を中心に記して、「樺太及びシベリア旅行」は節を終えています。

■『東邦協會々報』の「樺太及びシベリア旅行談」

先に見たとおり、『体験八十五年』での「樺太及びシベリア旅行」では、主に樺太の記録しか記されていませんが、この点について本多博士は「これには別に、「樺太及びシベリア旅行談」なるパンフレットまで出したので、ここにはその大要を記するに止めたい」と述べており、本書ではシベリアの記録を全て省略したものと考えられます。当該の「パンフレット」の存在は確認できていませんが、雑誌『東邦協會々報』第一〇九号(明治三十七年三月二十日発行)雑算に本多静六の「樺太及びシベリア旅行談」という記事があり、これが先述のパンフレットに類するものと推察されます。その内容を概観してみると、まず樺太においては、人口比率や地理的特徴、気候、植生、風習、産業、物価等について詳細に記録されています。シベリアについては、ウラジオストクとハバロフスク付近の植生や拓殖事業について見識が述べられ、そのほ



「樺太及びシベリア旅行談」参考地図

外來の人に対して非常に親密にするです。」

中で中々親密にやつて居る、中には露西亞の士官が時計杯の修繕を日本の船に頼んで、小樽や函館で修繕して貰ふ様な事が少なくない、或は種々な買物を日本まで頼むです、すべて山中の人は他の人が訪ねて行くと非常に喜ぶやうなもので、交通不便な島国の人は、

「：船が着くと云ふと非常に市中の者が喜んで人氣が立つです。鎖で繋がれた所の罪人まで新しい襦袢を着て出る。：(中略)：船の碇泊して居る間市中の者は、皆な仕事を休んで居る、殊に奇妙な事は、此地に居る所の重なる官吏、即ち税関長とか郵便局長とか云ふやうなものとは勿論の事、市長のやうなものまで打揃て日本の船に入つて来て、酒の馳走になつて喜んで中々親密にやつて居る、中には露西亞の士官が時計杯の修繕を日本の船に頼んで、小樽や函館で修繕して貰ふ様な事が少なくない、或は種々な買物を日本まで頼むです、すべて山中の人は他の人が訪ねて行くと非常に喜ぶやうなもので、交通不便な島国の人は、外來の人に対して非常に親密にするです。」

分かります。(1)

「南サハリンをロシア人が占領するとともに、漁業は衰退期に入り、そのまま今日に及んでいる」と評しています。魚に対する博学的知識が不足しており、流刑地民の生業たりえない状況を述べつつ、さらに、日本船が漁業の際、ロシアに支払う税金が「サハリン資源開発によってわれわれが得ている唯一の所得」と皮肉のように記しており、本多博士の言葉があながち誇張ではなかったことが

「：船が着くと云ふと非常に市中の者が喜んで人氣が立つです。鎖で繋がれた所の罪人まで新しい襦袢を着て出る。：(中略)：船の碇泊して居る間市中の者は、皆な仕事を休んで居る、殊に奇妙な事は、此地に居る所の重なる官吏、即ち税関長とか郵便局長とか云ふやうなものとは勿論の事、市長のやうなものまで打揃て日本の船に入つて来て、酒の馳走になつて喜んで中々親密にやつて居る、中には露西亞の士官が時計杯の修繕を日本の船に頼んで、小樽や函館で修繕して貰ふ様な事が少なくない、或は種々な買物を日本まで頼むです、すべて山中の人は他の人が訪ねて行くと非常に喜ぶやうなもので、交通不便な島国の人は、外來の人に対して非常に親密にするです。」

魚の目を赤く描いてある支那のサ

民地の状態を呈する事であり、即ち汽船が港へ着ますると金釘の厳めしい制服を着けて、馬鹿長い長靴を穿いて、外見丈は威儀堂々たる税関の役人の嚴重なる検査に接しては、自ら専制政治の露西亞国に這入つたやうな感じを為しますが、更に乗移りたる所の艇が、

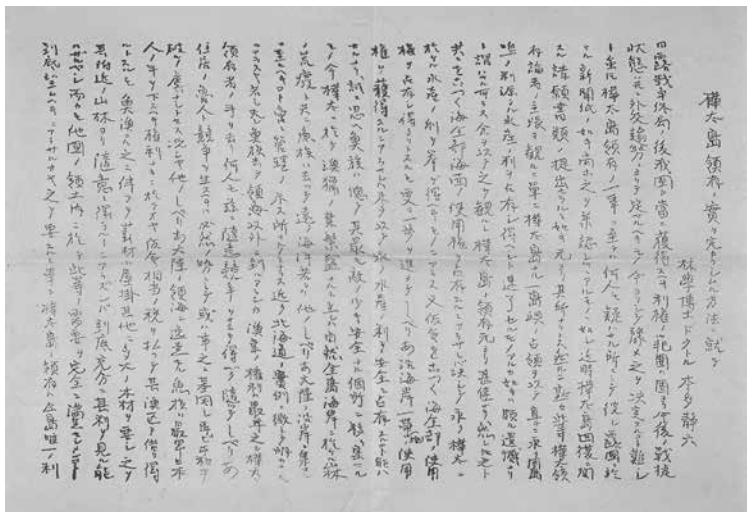
「：浦潮斯德は漸く三十年來新たに開かれたる港としては、割合に急速の発達を為し今は人口五万に達し、内日本人も三千人に余つて、中には巨万の財産を有して、所謂西伯利亞の一等商店の位置を占めて居るものも少なくありません、而して殊に我々の奇態に感じましたのは、此市街が全世界的殖民地の状態を呈する事であり、即ち汽船が港へ着ますると金釘の厳めしい制服を着けて、馬鹿長い長靴を穿いて、外見丈は威儀堂々たる税関の役人の嚴重なる検査に接しては、自ら専制政治の露西亞国に這入つたやうな感じを為しますが、更に乗移りたる所の艇が、魚の目を赤く描いてある支那のサ

か本多博士自身の現地での経験がエッセイのように綴られています。また、樺太とシベリアそれぞれについて、日露戦争が開戦した直後ということもあって、現地を領有した際に期待される利益や産業についても記述されています。明治期に本多博士のような知識人が樺太やシベリアを旅行した記録は非常に貴重であり、異文化体験や異文化交流の興味深い内容も含まれているので、次節からいくつかエピソードをご紹介します。

■コルサコフの港にやってくる日本の汽船

当時、コルサコフでは、主に海路

ンパンであるのと、浜辺に群集せる汚穢なる支那人の苦力が、先を争ふて頼みもしないのに人の荷物を目的もなく昇出す混雑乱脈、到底杖の力に依らざれば通行し能はざるが如きは宛然是れ上海、天津辺の支那的港湾たるを免れない、更に上つて波止場の広場に至れば、白装束に冠を戴いて、画で見た天神様のやうな風をして、朝鮮松の種子や西瓜の種を売て居る、髯と煙管の馬鹿長い朝鮮人の多いの



「樺太島領有ノ実ヲ完カラシムル方法ニ就テ」
草稿 明治37年1904頃(久喜市所蔵)

は、宛も是れ京城、仁川辺の景色であります、更に進んで上町の方に至りますと蝦茶式部が書籍を抱えて通学するものや、足駄を穿いて前垂掛の下女が蘿蔔、胡蘿蔔の風呂敷包を提げたる体、宛然是れ東京築地辺の景色で到底之れ日本の殖民地なるを免れない。其他巴里や維也納の美人も居れば倫敦、伯林の商人も居る、米人は勿論印度人も土耳其人も居る、即ち此港一箇所に於て、殆ど世界各人種の生活状態を見ることが出来る世界的殖民地でありますから、我学生杯の、避暑的修学旅行には最も適す所であります、現に敦賀又は七尾からは僅に四十余時間の航路で、二等船賃が十四円、往復二十五円に過ぎませぬ。」

■ハバロフスク道中—
ウオッカ、サモワール、
ご馳走—

ウラジオストクから北に約七五〇kmのところにはハバロフスクという都市があり、本多博士は同地へ汽車で向かいました。その道中の停車場で、本多博士

はロシアの代表的な酒ウオッカと出会っています。以下でその部分を抜粋します。

「…重なる停車場へ行くと、其近所の百性が、麵麩牛乳、鶏卵杯を売て居ります、中には黒麵麩を腐らしたような麦酒のやうな泡を吹く所の、黒砂糖水のやうなオーツカと云ふ甘酒を売て居るものもある、此酒は一壺十五銭位であります、併し普通の多くの客は砂糖と紅茶と一つの薬缶を携へて重なる停車場で煮立つた湯を呉れますから、それを貰つて茶を入れて麵麩を齧るです…」

汽車には士官夫人たちが多く同乗していたやうで、ロシア特有の湯沸し器サモワールを本多博士は「薬缶」と表現したのかもしれない。また、ハバロフスクでもてなされたご馳走について、東欧の郷土料理であるボルシチを連想させる、次のやうな記述もあります。

「…所謂露西亜流のソップで酔入のソップです、中に一片の牛肉と馬鈴薯、葉菜杯が沢山這入つて居る、ソップの分量が三合計りあつて、中に種々這入て居るからソップと云ふものの日本の薩摩煮とても云ふべきもので、中々腹の張るものです…」

■おわりに

日露戦争中に本多博士が書いた「樺太島領有ノ実ヲ完カラシムル方法ニ就テ」という草稿では、自身の北方での調査をふまえて、戦況によつては樺太とシベリアの沿岸を占有することを提案しています。本多博士の目にも、樺太は魅力的な土地と映つたのでしよう。樺太(あるいはサハリン)は十九世紀から日露両国で領土問題の絶えない、難しい土地ですが、当時の現地での両国人の關係は決して悪くなく、本多博士の記録を見るとむしろ友好的であり、チエーホフも「土地の当局と日本人の關係は、当然そうあるべきだろうが、うまくいつている。儀式のたびに、おたがいにシャンパンを御馳走しあうほか、双方ともこの關係を維持するため、別の方法も見出している(2)」として、両国が歩み寄っている様子を描いています。日露關係が緊迫している現状ですが、本多博士の樺太、シベリアでの記録は、両国の豊かな国際交流について今一度、再認識できる史料といえるでしょう。

※註(1) (2) 『チエーホフ全集 十三』中央公論社、昭和五十二年。
※本多静六の著書の引用については、原則、旧字体を新字体に改めた。また、読みやすさのため、筆者が一部の漢字にルビを振つた。

顕彰する会が「彩の国森林・林業表彰」を受賞【報告】

令和四年十一月十五日、埼玉県知事公館において、令和四年度彩の国森林・林業表彰式が行われ、大野元裕知事より本多静六博士を顕彰する会が表彰されました。

彩の国森林・林業表彰は、埼玉県が主催する表彰で、これまで森林の整備や林業の振興に尽力し、特に功績があつたと認められる個人・団体に贈られるもので、個人の部では元小鹿野町長の福島弘文氏が、団体の部として本会が受賞したものです。

この度本会が受賞した理由は次のとおりです。
●本多静六博士生誕地記念園において、開園当初から会員によって継続的に園内清掃活動を行っており、今年で三十周年を迎えたこと。

●久喜市菖蒲町三箇地内において、



埼玉県知事公館で行われた森林・林業表彰式の様子

博士の思想に基づいた「本多静六博士の森づくり」を実践していること。ここでの博士の森づくりは、現在県内二十五団体によって進められている「本多静六博士の森づくり」の第一号であり、年四回程度の森林整備を精力的に行っていること。

●本多静六記念館において、来館者に本多静六博士の思想・功績等について詳しく解説するボランティア活動を長く続けていること。

表彰式には、本会の渋谷会長と斎藤理事が会を代表して出席し、大野知事から表彰状と記念品(表彰状の木製レプリカ及び置き時計)が授与されました。現在表彰状と記念品は久喜市役所菖蒲総合支所五階の本多静六記念館閲覧テール付近に配置されています。

この度の県知事表彰は、本会会員はもとより多くの関係者の皆様の御支援、御協力により受賞したものであり、改めて関係各位に御報告申し上げますと共に、本会ではこれを機に顕彰事業の充実に一層邁進してまいりますので、皆様の御支援、御協力をお願い申し上げます。

三年ぶりに日比谷公園と明治神宮を訪問

―「本多静六博士ゆかりの地訪問」を再開―

コロナ禍の影響で休止していた本多静六博士ゆかりの地訪問が、令和四年十一月十日、市民二十二名参加のもと、感染症対策を行ったうえで三年ぶりに実施されました。

最初の訪問地となった日比谷公園では、東京都公園協会と水の市民カレッジ事務局長のお出迎えを頂いた後、会議室において担当者から公園の概要等について話を伺いました。その後日比谷公園副園長の案内で園内を視察しました。

中でも明治三十六年(一九〇三)の開園当初からある雲形池の鶴の噴水や東京都指定有形文化財でもある旧日比谷公園事務所等、普段であれば見過ごしてしまう所まで紹介してもらうなど、参加された皆さんは専門家ならではの詳しい説明に聞き入っていました。

続いて訪れた明治神宮では、林苑担当の主任技師の方から、社務所内での講義に続いて、林苑内を案内して頂きました。講義中写真で見せて頂いた大正九年(一九二〇)創建当時の様子が今とは大きく異なっていたこと。百年間でほぼ自然林の姿に成長を遂げたこと。全国から沢

山の献木が寄せられたこと。明治神宮の森の造営が日本の造園学発展に大きく役立ったことなどを伺いました。

二か所のゆかりの地訪問に参加された皆さんは、どなたも満足された様子で家路につきました。

今回訪れたゆかりの地は共に東京を代表する観光地でもあります。が、埼玉県内にも大宮公園をはじめ、秩父の羊山公園、川越の伊佐沼公園、飯能の天覧山などがあります。近くにお出掛けの節は是非立ち寄って見てください。



「首かけイチョウ」前での集合写真、右後は松本楼

本多静六博士の森づくりに想う

—会長退任にあたってのごあいさつに代えて—

顧問 柴崎 一

このたび令和四年度の総会をもちまして四期八年務めさせて頂きました会長職を退任させて頂きました。皆様には多大なるご支援ご協力を賜りましたこと、この紙面を拝借して厚く御礼申し上げます。

任期中これといって誇れるような事業はできませんでしたが、一つだけ心に残る思い出がございましたので若干ふれさせていただけます。それは、埼玉県が行っている



菖蒲町三箇にある本多静六博士の森。間伐や下草刈りも行われ見事に生長した平地林。

「本多静六博士の森づくり」事業のことです。この事業は近年失われゆく里山、平地林の再生事業として県が実施しているもので、その第一号として県と久喜市、顕彰する会の三者協働事業として実施されたものです。場所は博士の生誕地に近い久喜市菖蒲町三箇にある菖蒲南部産業団地内の造成地

○・二ヘクタールです。

この事業の特徴は、植樹用の苗づくりから始まることにあります。苗づくりを担当したのは地元三箇小学校児童による緑の少年団を中心にして市民有志、顕彰する会の会員等で、私個人も五十株くらいをあまり育成に協力した記憶があります。

このような準備を経て平成二十一年二月二十三日の植樹祭を迎えました。当日は、昨夜らしい小雪混りの雨もあがりなんとか植樹作業は可能な状態となり、主催者、緑の少年団、市民有志など多数の関係者が持ち寄った苗木の整然とした姿を見ることができました。

その後私は、六月初めに苗木の活着状態を見るため植栽した場所

に足を運んだところ、予想だになかった光景を目にしました。それは雑草が生い茂った無残な姿でした。

しばし茫然と立ち竦んでいたことは終生忘れることはできません。周章狼狽していても事態の好転は望めません。この事業に協力した関係者のことを思えば、一日も早く好転させることが急務であると考へ、その方法を模索しました。

結論として、先ず苗木の株周りを手作業により株を痛めないように除草し、畝の部分は除草剤を散布することで早速作業に取り掛かりました。しかし、炎天下での単身作業は大変な体力を要し「言うは易く行うは難し」の言葉どおり過酷な作業でした。除草作業はなんと二日間を終了し、あとは一日千秋の思いで好結果を待つだけとなりました。

この間居ても立ってもいられない気持ち強く味わいましたが、三日に一度の見回りを続けた結果、半月後には苗木に芽吹きの際が見られるようになり、一人相好を崩した思いがあります。この上は、一頭地を抜く平地林に生長するよう密かに期待する日々でした。

この後の育成管理は顕彰する会

の役員のみなさんの協力によって順調に生長し、移植時三十センチメートル前後の苗木は今では見上げるような姿に変身しました。

植樹祭から十三年を経た頃、順調に生長を続ける木々でしたが、このまま放置すると互いに牽制し合い生長に陰りが見られることから、担当副会長の助言を得て久喜市に依頼して二回にわたって間伐を実施して戴きました。この間伐の効果もあって今では見ごたえのある平地林に生長しました。

このような森の姿を見て本多静六博士もさぞや喜んでおられることと思っております。

会長退任にあたり貴重な紙面を拝借し、雑でまとまりのない想い出話を述べて戴き誠にありがとうございました。

むすびとなりましたが、本多静六博士を顕彰する会が渋谷克美新会長を中心として役員、会員のみなさまの協力のもと更なる発展をされますようご祈念申し上げます。

【編集発行】

本多静六博士を顕彰する会（窓口左記）
久喜市市役所企画政策課
〒346-8501 久喜市下早見85-13
電話 ○四八〇(二二)一一一一(代)
久喜市菖蒲総合支所総務管理課
電話 ○四八〇(八五)一一一一(代)